

竹取物語断簡新出二葉

——（付）延べ書き「富士山記」——

高 田 信 敬

要 旨 従来二葉のみ知られていた伝後光厳院筆竹取物語に、今回さらに二葉の新出資料を追加、物語断簡の投げかける諸問題についてその一端を明らかにしたい。なお鎌倉後期～南北朝写と思われる延べ書き「富士山記」もあわせ紹介。

一、本文研究瞥見

「物語のいではじめのおや」として長い享受の歴史を持ちながらも、竹取物語は古写本にめぐまれず、天正二十年中院通勝識語のある武藤本⁽¹⁾、無奥書だが永祿・天正頃写かとされる吉田本⁽²⁾、そしてここにとりあげようとする伝後光厳院（一三三八〜一三七四）⁽³⁾筆断簡の他には、中世に溯りうる伝本を見ない。

いったい、室町中期を下らざるもの——おそらく南北朝〜室町初期か——として紹介された京都毘沙門堂藏手鑑『龍雄』⁽⁴⁾中の一葉が、研究者の強い関心の的となったのは、その衆に擡んでた書写年代の古さばかりによるのではなく、僅々百数十字ながらそこに特異な本文が示されているゆえであった。所謂「古本」である。

現存諸伝本は、周知の如く古本系と通行本系とに大別⁽⁵⁾される。「古本」の名は三手文庫本今井似閑奥書の「ある古本を以て一校」に由来し、他系統本文への書入によってのみわずかにその姿をうかがうことの出来るものであった。が、この系統唯一の完本たる新井本の出現によって、「古本」は単に一個の「古写本」を指すものではなくなり、通行本に対立する伝本群の総称となったのである。ただ、新井本は文化十二年の書写にかかり、書写年代の新しさゆえにその本文的正統性に一沫の不安が残るものではあった。

こうした状況での伝後光厳院筆断簡の出現は、そしてそれが偶々「火鼠の皮衣」の部分であったことは、以後の研究史の展開に決定的な意味をもっていた。

すなわち、この断簡は、古本系本文とはほぼ一致し通行本系から遠いゆえに古本系諸本中最古の伝本として位置づけられ、また古本系基準伝本たる新井本はその本文の淵源がすくなくとも中世には存したことを保証されて、書写年代

のいちじるしく下る難点を補強されたのである。つまりこの断簡は新井本からは自らの本文的帰属の決定をうけ、逆に書写年代の古さという權威を新井本に及ぼした。

ここに至って古本系は、わずかに一葉の断簡とはいえ諸伝本中最古のものを得て、名実ともに「古本系」となったのである。もっともこの系統本文に対しては種々の欠陥が指摘され、その古い由緒にもかかわらず現在では武藤本か古活字十行甲本かによるのが通例となっている。

ついで志香須賀文庫の一葉が新しく紹介されたのは、毘沙門堂の断簡の発見以後約二〇年たってからであった。これは「龍の頸の玉」の最後に近い部分で、諸本と比較の結果、伝後光嚴院筆断簡の必ずしも古本系に帰したいこと、さらに一步を進めて古本通行本のすべてを含めた現存諸伝本に対立する一本としてこれをとらえるべきことなどの重要な提言がなされた。しかしながら伝存わずか二葉の資料的制約もあって、竹取物語本文研究はさほど盛んとならず、これらの提言に対しても積極的反論も肯定もなされないままに現在に至っている。

さて近時新たに二葉の断簡を見出しえた。勿論懸案諸事項に最終的解決を与えるには量的に不足であり、今後一層の探求がなされねばならぬところではあるけれども、なおこれらの零葉は本文的・書誌的に少なからぬ問題を提示するものと思われる。以下具体的に検討をすすめてゆく。

二、新出の断簡

ここに新しく紹介するのは、都立中央図書館蔵手鑑『古名筆帖』⁽¹⁰⁾所収の一葉（巻末図版Ⅰ・Ⅳ）と、南園文庫蔵の一葉（図版Ⅱ）とである。

まず加賀文庫の分から。

寸法 縦九・八糎、横九・八糎。

料紙 斐紙、水をかぶった如く見える。虫損若干。

一面九行 書写面縦八・五糎、横八・五糎。極札「二条為定卿しきめ見す」⁽¹¹⁾
「心」^(墨印)

従来知られていた二葉(図版Ⅲ)とまったく同筆で、既述の如く南北朝～室町初期写と推される。現在までに確認しえた四葉の断簡のうち、これだけが筆者を二条為定(一二九三～一三六〇)としており、爾後この伝称筆者名が後光厳院と共に調査の手がかりとなるであろう。⁽¹²⁾ 内容は志香須賀文庫蔵断簡のすこし前⁽¹³⁾にあたる。

次に南園文庫のもの。

寸法 縦九・七糎、横九・七糎。

料紙 斐紙、加賀文庫蔵断簡よりやや黒ずんでいる。⁽¹⁴⁾ 裏に「岡田氏蔵」の朱印。

一面九行、書写面縦八・五糎、横八・五糎。極札「後光厳院女そと」⁽¹⁵⁾
「村守」^(墨印)

他の三葉とかなり似通った文字もある——特に「た」「な」「見」等——が全体に線が細く、弱い。また「や」は字形に差あり、別手とするのが穏当なところであろう。書写年代も他の三葉より若干下るとしておく。内容は「御門の求婚」初めの部分。

以上新出の二葉と既知の二葉(図版Ⅲ)とを内容の順にならべ、諸項目を整理してみる。(15頁表I)

最も議論のわかれそうなのは、(4)の南園文庫蔵断簡をいかに位置づけるかについてであろう。類似した書風で書型書写面寸法とも他とほぼ同じこの断簡は、後光厳院本——加賀文庫のものに二条為定の極札が付されてはいても、従来竹取物語断簡と後光厳院の名とを不可分にとらえてきたので、今これらを後光厳院本と仮に呼ぶこととする——と

新うのほると 事・
 武うのほると 事・
 新うのほると 事・
 武うのほると 事・

* 「もし」と書き、「し」の上に「き」を重ね書きにする。

この部分「もろこしに」以下の古本系独自文をはじめとして、新井本によく一致し、この一葉だけを以てすれば、後光厳院本は古本系であり、しかも新井本にごく近いと言わざるを得ない。

(2) 加賀文庫蔵

新 しきめ見・すいかゝすへきいかならむと／．．．の給にかちとりこたへて申こゝらふ／ねにのりて．．．ありく
 武 を．．．．．ん するそと 船・ まかり

新 にまたかくわひ／しきめを見す・ふねうみのそこに／いらすはかみおちかゝりぬへしもし／さいはゐに神のたすけ
 武 た み 神・を ひ

新 あらはなん．．／かいたうにふかれをかし．．ぬへかんめり／うたゝあるぬしのみとんにつかふ／まつりてそゝろ
 武 む 道・ おは まし る・ も
 新 みなみの 海・ おは し．．． て もと う す

武や へ 内・侍 たまふ のうちいう・お 也・

るへきよしの／たまへ・るになむまいりきつるといゑはさ／らはかく申侍らんと・て入・ぬかくやひ／めのも

新 給・ へ いひ いら

武・ はせつ ・ へ いひ ・

とにはやこの御つかひにたいめん

新 ・

武・ か

* 「こと」は墨がかすれている。一応かく推読した。

* 「へし」と書き、「し」の上に「き」を重ね書きする。

*** 「き」補入。

冒頭部分に大きな異同があり、これを新井本の脱文とするか、異文と見るかで評価がわかれる。おそらく既に説かれて⁽¹⁹⁾いる通り、古本系すべてに共通する脱文であろうが、もし然らばこの断簡は現存古本系諸本とはまるで違った系統であるか、もしくは古本系において大幅な脱文を生じる以前の姿をとどめているかのいずれかとなる。それ以外のところでは新井本に近づいている。

さて断簡(1)においては、古本系の大きな特徴である「もろこしふね」の一文を有しており、また断簡の独自異文も「あよみとう」↓「あゆみとう」は決定的な差とはなしたがたく、実質的には「上」↓「まうのぼると」の一項の

みであり、まさしく古本系の本文である。ところが、次い発で見された断簡(3)は、既述の如く独自異文の目立つもので単純には古本に帰しえない、むしろまったく別個の系統とするのが妥当なものであった。断簡(1)から(3)へと、すなわち「火鼠の皮衣」から「龍の頸の玉」へと、断簡によって推測される後光厳院本を読みすすめていくとすれば、その本文は古本系からだんだん離脱⁽²⁰⁾する傾向があるのではないかと、一応の予測をたてうる。そしてこれが連続的变化ならば、断簡(1)と(3)との間に存在する本文は、古本系からの離れを、しかも(3)ほどはなはだしくない形で示しているであろう、と。

そこで先の古本系通行本系代表本文による校合を手がかりに、諸本一般を見わたした結果を後光厳院本中心に整理し、次のような数値を得た。(15頁表Ⅱ)

一 応予測の通りとなっている。しかも、もし古本系特有の脱文を考慮に入れるならば、現存資料の範囲内においては、(1)↓(4)の順で古本系との距離が増大している。このように考えると、断簡(4)は(1)↓(3)の連続的变化の延長線上にあり、その意味でこれを他三葉と同列にあつかいうる、すなわち後光厳院本の忠実な転写本もしくはごく近い系統の本が断簡となったものと解しうる。

勿論これは仮説の上に仮説を重ねた結果得られた一つの解答であって、本文が作品の進行にしたがって連続的に変化するか否か、古本系の脱文が生じる前の姿を南園文庫蔵断簡(4)に求めてはならないか、もしそれが可ならば、脱文の生じた時期を推定できないか等々、疑問が次々と生じてくるばかりである。

四、断簡の位置

以上の如くであつてみれば、新出断簡二葉のうち加賀文庫蔵のものは、従来知られていた二葉のツレであり両者の中間に位置し、本本的特徴もまた両者の中間的性格——毘沙門堂の示す古本系本文より離れ、なお志香須賀文庫ほど孤立的でない——であると言えよう。

すなわち最初の一葉によつて古本系と断ぜられた後光厳院本は、次の一葉志香須賀文庫蔵断簡の発見によつて現存諸伝本から大きく離れた——諸本中これに最も近いものを強いて求めれば、やはり古本系であろう——その相貌を見せはじめた。加賀文庫蔵新簡が、古本にも共通点を持ちなお諸本全体から離れてゆこうとする本文を示していることは、志香須賀文庫蔵断簡の個所だけが孤的に諸本と対立しているのではなく、後光厳院本全体にその傾向があり、しかも後の方ほどこの傾向は強まることを示唆すると言える。

南園文庫蔵断簡は評価がむずかしい。形態上の類似は、これを他の三葉とが無関係ではないことを示しているであろうが、今のところいかなる解答もすべては推測の域を出ない。

後光厳院本以外の伝本がまだ存在していて、今後調査の進展にともない幾葉かの断簡が出現するのであるか。それとも後光厳院本の転写たるにとどまり、これを大きくはずれる伝本は存在しないものであろうか。この種の議論に決着をつけるのは、論よりもまず証拠であり、資料の博搜が望まれるところである。今後の課題としたい。

(付) 延べ書き「富士山記」

都良香の「富士山記」は、当代一流の漢文学者がとらえた霊峰の綺談にして、竹取物語研究で最もよく引かれるものの一つである。

ところで、まったくの偶然であろうが、加賀文庫の竹取物語断簡は、なんとこの「富士山記」を延べ書きにしたものと共に、同一面の上下に貼られている(図版IV)。極札はない。

「富士山記」の単独写本が世上に存在するらしい。しかし延べ書きの伝本は管見に及ばない。また「都氏文集」の延べ書きの一部とも思われない。では本朝文粹の延べ書きであろうか等々考えてみても答は出そうもないので左にその形状と籾字―字体は通行のものによる―とを示し、以て博雅君子の垂教を俟つ。

寸法 縦一六・一糎、横一五・四糎。

料紙 斐紙。

一面一〇行 書写面縦二三・七糎、横一三・〇糎。

鎌倉後期々南北朝の写か。訓点書き入れ等なし。

うへに平地有広一許里そ

のいたゞきの中央くほにして

体韻^{*₁}をかしくるかことし韻^{*₂}の底に

神池あり池のなかに大石有石の
体あやしうして躡虎かこと

しそのこしきの中に常に

氣有其色鈍青也其甌のそ

こを見れば湯のことく沸騰

遠くしてのそめはつねに

けふりの火のことしその頂

* 竹取物語断簡極札のために見えない。いまかく推読しておく。

* * 「甌」「甌」の異体か。

なお、加賀文庫の手鑑『古名筆帖』中の平安時代に溯りうる書写資料としてはほぼ仏典のみであり、名物切の類はごく稀であつてしかも時代の下るものが多い。しかしながら内容のおもしろい断簡がいくつか収められているので、いづれ機会を得て考察したい。

註

(1) 武藤元臣、茨木辰三郎、同清次郎、フランク・ホーレーと伝来し、弘文荘を介して天理図書館に入る。昭和五三年重文指定。天理図書館善本叢書に影印。

(2) 古典文庫三〇九『竹取物語（古写本三種）』解説による。

(3) 新井信之『竹取物語の研究 本文篇』（昭和一九年）。書写年代に関していくつかの説があり、新井の認定をそのままうけるものが最も多い。しかし片桐洋一「竹取翁物語について」（版本文庫八の別冊、昭和四九年）は一時代下げて室町中期か後期の写とし、久曾伸昇「竹取物語新出古鈔断簡の意義」（『愛知大学国文学』八、『仮名古筆の内容的研究』昭五五年に再説）

同『竹取物語』（昭和四九年）解説では逆に室町初期以前と古く見ている。目睹しえた資料の限りで言えば、紙質書風とも久曾神説に適合するものと思われる。

(4) 片桐前掲書に「かつて京都市東山区山科の毘沙門堂に蔵せられていた」とあり、現在その行方を知らない。

(5) この規定は中田剛直『竹取物語の研究 校異篇 解説篇』によってなされた。諸本の詳細については該書によらたい。

(6) 柿本奨『竹取物語の読み』（『国語と教育』四）

(7) 逆に古本を高く評価するのは南波浩校『異本竹取物語』（昭和二八年）、同『竹取物語・伊勢物語』（昭和三五年）。

(8) 久曾神前掲論文。

(9) 伝後光厳院筆断簡Ⅱ古本が通説化しているわけだが、野口元大『竹取物語』（昭和五四年）解説は久曾神説を継承する。

(10) 函架番号「五〇三二・一、二」。伝来の異なる大小二つの手鑑を一括整理保管している。当該の一葉は「五〇三二・一」の第一〇折裏面右上に押す。なおこの面の全景が図版Ⅳである。

(11) 門人系神田家で出した極札。ただし台紙貼付のため裏印の如何なるかを知らず。

(12) 伝称筆者について略記しておく。

後光厳院は文化版古筆名葉集に記載なく、新撰古筆名葉集に至って葉室切以下一六種の切を掲出。竹取物語断簡に相当するものはその中にある。ただ翰墨城所収の源氏物語切が似た書風であると言える。因みにこの切について翰墨城解説は、ツレはまだ確認されていないとするが、『梅園奇賞』中に模刻一葉あり。

二条為定も文化版古筆名葉集に記載なく、新撰古筆名葉集で冷泉切以下一二種が掲出されるが、竹取物語断簡に合致するものはない。各種複製・手鑑中の伝為定筆資料で、この断簡と同筆乃至類似書風のものも今のところ存在しないようである。

(13) 志香須賀文庫蔵断簡はその右端に折り目と綴穴があつて、丁のオモテ面であると思われる。もし本文上にいちじるしい欠脱がなければ、加賀文庫蔵のものとは六面三丁分を隔っていたことになる。

(14) 料紙は保存状態・伝来等によって外見上大差を生じる。毘沙門堂のものも新井前掲書によれば「かなり黒く時代が附いて」いるらしい。したがって料紙の外見からツレか否かを決定するのは困難な場合もある。が、諸条件を勘案して南園文庫蔵断簡は別料紙と判ず。

(15) 古筆分家で出したもの。ただし裏印なく何代目の所為か不明。

(16) まとまった典籍を転写、それが後に分割された場合と、すでに断簡となったものの模写である場合と二様ありうる。前者

の例としては四条殿切(定頼集)、後者の例すなわち古筆の偽物としては田村悦子「藤原俊成自筆千載和歌集断簡日野切の考察とその集成」『美術研究』一三三、小島孝之「治承二年右大臣家百首の新出資料とその考察」(『国語と国文学』六七九)等に興味深い資料があげられている。ただし名物切でもない、またあまり見栄えのしない竹取物語断簡の偽物と言うのはまず考えられない。

(17) 中田前掲書によれば、他系統本文への書入の形で存する古本はすべて三手文庫今井似閑本に起源し、その今井似閑本は新井本に近い一本に依ったのであるから、結局古本系内部には相互に遠い距離を持つ伝本はなく新井本をもって古本のすべてを代表させる。

(18) 久曾神前掲書。ここでは断簡を原本系と規定し、すべての現存諸本と大きく隔絶した存在と見る。すなわち左の如くである。

〔原本系統(断簡)〕
〔改訂本系統〕古本系統
〔通行本系統〕

諸本間の異同は改訂本系統の増補修訂に起因すると考えるのであって、この発想は略本的性格をもつ志香須賀文庫蔵甲本の許価においても貫徹される(前掲久曾神『竹取物語』解説)。

ただし諸本校合によって我々が知りうるところは、一般に諸本間の相対的距離関係であって、時間的因果関係——伝本間の親子関係、原本と改訂本の関係等——は校合結果のみからは直接には導出しにくい。つまり諸本間の距離関係は久曾神説の如くであったとしても、これだけではそのいずれが原本であるかの認定は論理的に困難である。

(19) 中田前掲書。

(20) 勿論結果的に距離が生じていることを意味するのみであって、どちらかが原態であると言うのではない。

(21) 凶書総目録には一本も載せないが『群書解題』は写本ありとする。

(22) 聖徳太子伝暦は中世よく読まれ、伝源家長筆の天王寺切はその延べ書きである。現在三葉を確認している。また伝後京極良経筆の興福寺切は白氏文集新業府の延べ書きである。仮名書き法華経、仮名貞観政要などと共に、中世における漢文資料の仮名書きとして総体的に考えてゆく必要がある。

(23) 現存本は卷三、四、五のみの残欠であり、そのうちに「富士山記」は含まれていない。なお伝本論として中条順子「都氏文集の諸本について」(『語文研究』四六)がある。

表 I

(4)	(3)	(2)	(1)	伝称筆者	寸法(縦×横・樞)	内容(岩波文庫の頁・行)	所蔵者
後光厳院	後光厳院	二条為定	後光厳院		一〇・二×一〇・〇 九・八×九・八 九・九×九・八 九・七×九・七	二五頁八〜一三 三二頁二〜六 三四頁三〜八 四〇頁三〜八	(毘沙門堂旧蔵) 加賀文庫 志香須賀文庫 南園文庫

。一面九行書写はすべてに共通

。(1)と(3)の寸法は論著によって少差あり、ここでは久曾神昇『仮名古筆の内容的研究』による。

。(1)〜(3)は同筆、(4)は別筆。

表 II

項	目	断簡(1)	断簡(2)	断簡(3)	断簡(4)
古本と共通し通行本諸本と対立	5	[5]			
通行本諸本と共通し古本と対立	0	[1]			
古本・通行本を含めた諸本と対立	3				
立断簡の独自異文	5				[1]

。漢字仮名の別、明らかに誤写と思われるものを除く。

。通行本は中田剛直『竹取物語の研究 校異篇 解説篇』に掲げられた三九本のうち半ば以上と一致する場合をもって諸本共通と認定した。

。断簡(4)については、脱文箇所を除いて比較。この脱文を考慮すれば、すくなくとも現存古本系からは遠く離れていること、既述の如し。

後光厳天皇 女を



女をとりてくみくみせしは
よれよれにうめりてきりて
そけりたりきりてきりて
はそめしとみそをきりて
はとよがかりてきりて
とゆるるにきりてきりて
そよよかりてきりて
ぬそくやゆきんをきりて
ぬのゆきんをきりて

南園文庫蔵（等倍）

図 II

後光嚴院



そのはりやまのこ
たつひのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ

後光嚴院



そのはりやまのこ
たつひのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ
しをまのたつひ

上 毘沙門堂旧蔵 (約 1/2)
下 志加須蔵文庫蔵 (")
(久曾神昇『竹取物語』所載)

